

明石市

国際協力海外レポート

田口 久美子（たぐち くみこ）【JICA 青年海外協力隊】

赴任地：ガーナ共和国 ノーザン州サベルグ・ナントン郡サベルグ
職種：感染症対策
赴任期間：2013年7月～2015年7月（予定）



私は、JICA 青年海外協力隊の平成 25 年度 1 次隊、感染症対策として 2013 年 7 月からガーナ北部のサベルグに赴任している田口久美子といます。所属先は、ガーナ保健省の管轄下にある Ghana Health Service (GHS) で、任地であるサベルグにおける感染症の啓蒙活動を行うことが求められています。

ガーナに来て約 1 年が過ぎ、最初は慣れない生活に体力的にも精神的にもつらいときはありましたが、今ではかなり生活に馴染んで来ました。

私の住む地域はサバンナ気候で、季節は乾季と雨季が約半年ごとにやってきます。

乾季の時期は、ハマターン（※西アフリカで吹く貿易風）に乗ってアフリカ大陸北部にあるサハラ砂漠から砂埃が飛んで来て、家の外だけではなく、中まで砂まみれになります。ひどいときには、電子機器が故障するくらいです。また、夜は暑さがひどくて眠れないこともしばしばです。周辺の草は枯れ、砂地となります。

雨季になると、多ければ 1～2 日に 1 回は集中豪雨となり、激しく雷が鳴り響きます。雨が降るようになって周囲は緑が増えてきます。



任地の写真：平地に木が点在して生息しています。雨季に入り徐々に緑が増えて来たところです。



家に迷い込んできた仔山羊：家周りには、ヤギ・羊・牛などの家畜がたくさんいます。暑さの中、日陰を求めて仔山羊が家の敷地に入ってきました。

普段から、ヤギ・羊・鶏・ロバ・牛などがそら辺にいて、道をふさぐこともしばしばで、自然と共存している姿が窺えます。しかし、残念なのは、町並みや住んでいる周囲をみたところ、ゴミが放置されていて、所々とても汚いことです。せっかくの自然が台無しです。道にゴミを捨てる習慣があることも一つの原因でしょう。このようなことからマラリアなどの蚊を媒介とする感染症が蔓延しやすくなっているとも考えられます。

ここに来て一番思ったのが、水が大事であるということです。日本は水に恵まれているとは聞いていましたが、本当にその通りなのだと思います。こちらでは、特に乾季になると、1週間くらい水が蛇口から出なくなります（雨季でも水が出ないこともあります）。

食事に関して言えば、日本では薄味でも水がおいしいから食材がおいしく頂けるのだなと思います。こちらの水は、ご想像通りそのままでは飲めません。濾過して煮沸してやっと口に入れられるものになります。そのためか、こちらの料理は味が辛いものとかしっかりしたものが多くに思います。生活したての頃、そのままの水でお米をといでしまったのですが、案の定食べられたものではなく、ついにお腹も壊してしまいました。そのため今は、必ずペットボトルを使うか、袋に入ったピュアウォーターなるもの（これもちょっと化学的な味）を利用しています。

日本で恵まれた生活をしていただけに、こちらでは肉一つ買うのも一苦労な感じがします（肉は部位で売られていないため、自分でさばかないといけません）。日本のすごさを痛感します。

ガーナの人達は、みんな明るく親切な人が多いです。例えば、道の途中でバイクが故障して困っていると、『どうした？』と聞いてくれ、近くの修理屋さんまで連れて行ってくれたりもします。私自身同じような状況に合い、何度も助けてもらいました。

また、彼らは話好きで、朝職場に行くと、まず挨拶とお喋りが始まります。仕事はひとしきり喋ったあとから始まります。日本と同様、挨拶がとても大事で、世間話をして仲良くなってくると、たとえ上の立場の人でもとても親切にしてくれます。それでも、スリミンガー（外国人に対しての呼び名）を連呼されたり、子供たちが家をのぞきに來たりなど嫌なこともあります。



サベルグ病院 女性病棟の看護師さん達：2013年10月～12月まで、サベルグ病院に勤務していました。その間、2週間のみ女性病棟でお手伝いさせていただきました。



近隣のご家族：近所に住まれているご家族です。左端のおばあちゃん、まだ言葉がままならない私にいつも現地語で話しかけてくれます。

言語は、英語が母国語ですが、実際には話せない人も多く、現地語を話すことの方が多ようです。ガーナ全体では50種類くらいの現地語があるようですが、日本の方言などとは異なり全く違う言語なので、地域が変わると全く意味が分からなくなります。

私の任地ではダバニ語が話されていますが、現地の人とコミュニケーションをとるには、現地語は絶対必要です。約1年経った今、挨拶程度のことは言えるようになりましたが、通常会話はまだまだです。

宗教は主に、イスラム教とキリスト教で、ガーナ北部の私の任地ではイスラム教徒が多く見られます。日本人の宗教は何かと時々聞かれ、日本では特定の宗教を持たないことを説明するのですが、それがガーナの人にはなかなか理解できないようです。

イスラム教徒の人たちは、一夫多妻制で、私が道でたまたま出会った人でも、『結婚しているのか?』とか気軽に聞いてきます。妻や子供を多く持っている方がステータスが高いようです。イスラム教の場合、お祈りが1日5回、また、1年に1回1か月間ラマダンという断食の期間があり、そのときは日の出ている間に食事を取ることが許されていません。豚は不浄な動物とされ、豚肉は食べることができません。お酒も厳禁です。

一方、キリスト教では食べ物の摂取制限は特になく、1週間に1回日曜日にお祈りのため教会に出向いています。

ガーナでは、お互いの宗教に寛容的で、異宗教同士でも結婚している例もあるようです。他国では宗教同士の争いがある中、お互いを認め合う姿が素晴らしいなと思います。

最初に述べたように、私の活動は感染症対策で、主に現地での啓蒙活動が求められています。しかし、言語習得がなかなか困難なことや、地域の現状を知るために、現在は地域の病院や診療所の様ところを見学と疾患調査を兼ねて回っています。その中で気になったのは、検診に来る妊婦さんに貧血が多いことでした。施設によって異なりますが、ある診療所では初回に来院された際の血液検査で約7割近くの人が貧血でした。その原因として、医療スタッフの意見では、与えられた鉄剤・ビタミン剤などをしっかり摂取していないこと、金銭面の問題から栄養の高い食事を取れていないことが上げられました。実際の理由を知りたいと思い、食事回数や内容、鉄剤などの摂取状況についてアンケート調査を行いました。病院や診療所で行うと、見栄っ張りのガーナ人は素直に答えてくれず、しっかり薬を内服してなくても、『しっかり飲んでいるよ。』と答えられてしまいます。そのため、今度は直接家庭訪問し、アンケートを行う予定でしたが、言語の問題から、手伝ってくれる医療スタッフを探さなければならなくなりました。しかし、せっかくの休みに暑い中わざわざ家庭訪問を手伝ってくれるスタッフはおらず、やっと約束できたと思っても、土壇場でキャンセルされる始末です。そのため、さらに進んだ調査が困難となっています。

アンケートの結果に関わらず、貧血の妊婦さんが多いのは事実であり、今はそれを改善する植物などがないかと探しています。例えば、ガーナ北部に比較的にみられることの多い「モリング」はその候補として考えています。モリングはとても栄養素の高い植物で、美容にもいいとされています。



サベルグ病院の妊婦健診：平日の木曜日以外毎日、妊婦健診が行われています。検診では、血圧・体重・身長測定、腹部の触診などが行われています。



乳幼児検診：毎週木曜日には、乳幼児検診が行われています。写真は体重測定を行っているところです。

他の国ではすでに子供の栄養改善や妊婦さんの貧血改善に用いているところもあります。ガーナでは、葉を乾燥させて粉にし、スープなどに加えて食べるようです。任地で、このモリンガを栄養改善の手段として用いることができれば、低コストで手に入りやすくていいのではないかと考えています。ただ、妊婦さんが多量摂取することは良くないとの注意喚起がされているところもあり、他の食材についても貧血改善に有効なものがないか調べていく必要があると考えています。



乳幼児検診：ワクチン接種を行っているところです。



ポンタマレヘルスセンター：ポンタマレにある妊婦検診、出産、患者の診察を行っているヘルスセンターです。



乳幼児検診：遠方の村には、バイク出張で乳幼児検診に向かいます。写真は看護師さんがワクチンを打とうとしているところです。



地域の診療所の看護師さん：ポンタマレヘルスセンターの看護師さんです。このヘルスセンターでは、看護師さんが医師の様に診察・処方を行っていました。

また、診療所に来られる患者さんには、手・足の傷が元で、その部分が化膿してやって来る人も多くみられます。特に子供などは、裸足で外を駆け回っていることもしばしばで、遊んでいる間に傷を負ってしまうとも考えられます。そこで、傷へのばい菌感染を少しでも無くすために、外では靴やサンダルを履く習慣をつけてもらうことや、傷ができたところはできるだけ清潔にし、何かで覆っておくなどの対策指導を行っていけないものかと考えています。



足の傷でヘルスセンター来られた患者さん

これから後 1 年間、現地の人達ともっと親密になって、少しでも日本のことを知ってもらい、私自身がガーナの人達の役に立てればなと思っています。

2014/6/20 JICA 青年海外協力隊員 田口 久美子